

ピーター、デウイント〔八〕

青 人

畫學生が使用する繪具の選擇を見れば、其人の性質の強弱を明に覗ふことを得べし。通例其師が試みて要用なる繪具としたるものを用ゐんとしつゝあり。デウイントは此例より除外すべきものにて、甚だ珍奇なるなり。試にギルチンの調色板パレットと比較するも妙なるべきか。ギルチンは十五色を使用しぬ。曰く、インヂゴ。レーキ。ライトレツド。インヂアン、レツド。ローマンオークル。オルトラマリ。マダーブラオン。バートシーナ。ヴァンダイク、ブラオン。コローン、アース。ガンボーヂ。エローレーキ。ブラオンピンク。プラシアンブリユー。ヴェネシアンレツド。なり。

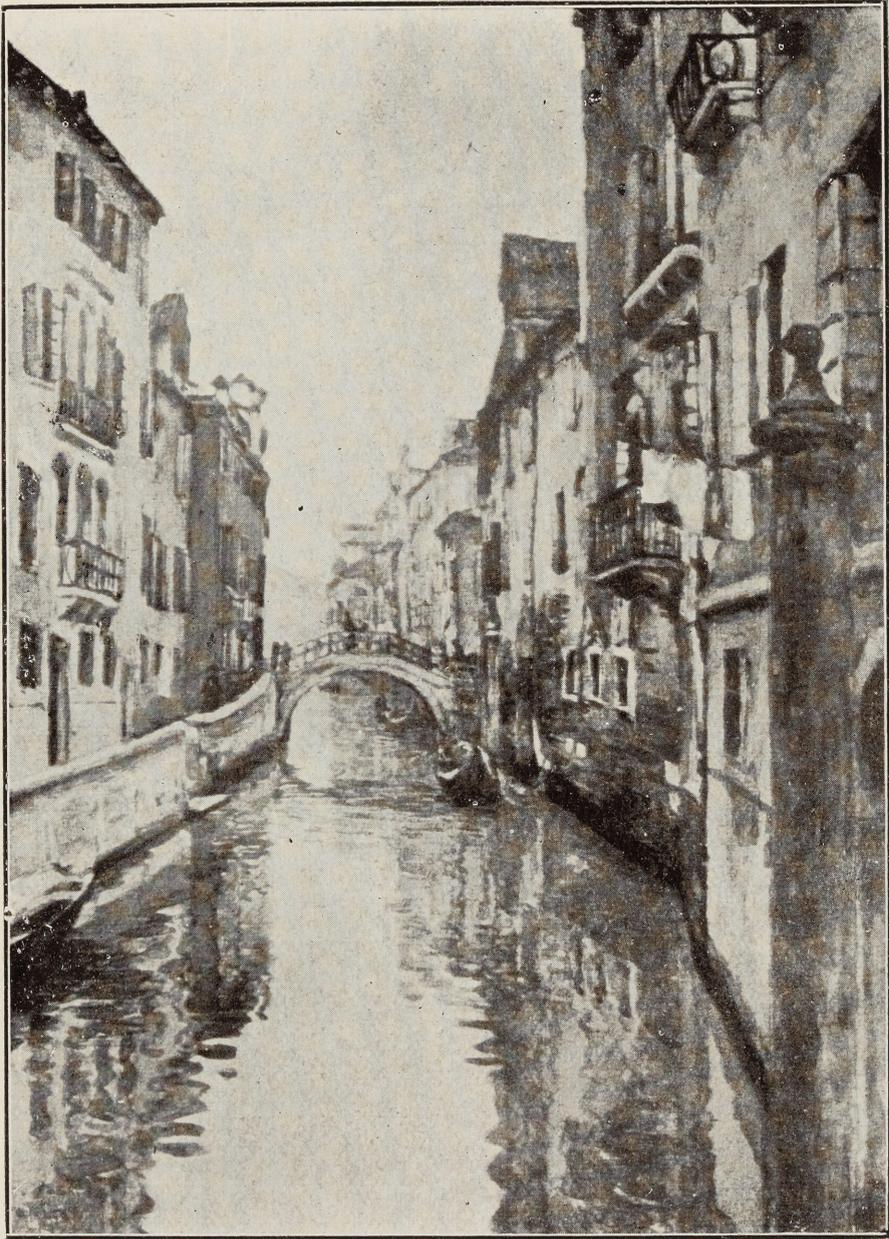
デウイントの普通使用したるパレットには左の十二色ありき。曰く、ヴェルミリオン。インヂンアレツド。プラシアン或はシアニンブリユー。ブラオンマダー。ピンクマダー。セピア。ガンボーヂ。エローオークル。バートシーナ。パールレーキ。ブラオンピンク。及インヂゴなり。此外に折に觸れて使用するもの四五種あり、曰くオレンヂオークル。ヴァンダイクブラオン。オリイヴグリーン。コバルト。エメラルドグリーンなり。總て繪具は乾製にて、使用の際は水にて和かにし置くなり。デウイントは坊間にある繪具箱に附屬せる珽瑯質の板を好まざりしかば、別に氏自身にて箱を工夫し居たり。氏は銀様の面の光れ

る金屬製の板を使用しけるなり。

氏が使用する筆は二本にて、共に大にして丸し。一本は古き秃筆にて、一本は新しき先の好く尖りたるものなりき。氏の水彩畫の寫生は、前景はアクシデントの仕上げを此秃筆にて表はすことゝなしぬ。かゝる描方はサウスケンシングトンの繪畫中に見ることを得べし。

「エ、コーンフィールド、アイヴィングホー」の如き郊外の好寫生畫に依て容易に此方法を見ることを得るなり。此の繪は各部共に筆力雄健にして流麗なるのみならず、潤澤ありて、色彩のものに豊富に、或ものは寒色に調和よく、宛ら巧に寶石を散箝めたらんやうに麗はしきなり。如斯き結果を得たれば、前景は秃筆を用ひて、擦過して、皺を作り、望み通りの結果の、ある偶然の事を出來かして、活氣を添えつゝあるなり。コーンフィールド、アイヴィングホーにも、これを見ることを得べし。前景より極遠景へと移り行く處にターナー、コブレ、フィールドイングの如き、漸減調グラデーション（色彩の融和）の變化はなかりき。デウイントは繪畫を洗滌して無邊の漸減調を得ることを嫌ひつ。もし夫れ氏の繪畫を洗滌したらんには、色彩の深き光澤ある繪の鮮新なる榮えある部分を損じ了りぬ、氏の製作の目的を凌辱せしむることゝならんなり。

此外またコーンフィールド、アイヴィングホーには三個の興味ある者あり。第一に樹木が粧飾上の價值は良好なるものにせよ、寧ろ描方の規則正しくて、隨意過ぎたらんなり。素よりこれ等は





樹木なれども、名を附するに躊躇すべきなり。此の疑問はデウ
イントが郊外の寫生の樹木を見て、常に起るものなられど、氏
はやゝもすれば樹木の種類の性質を誤りて研究する傾向ありし
なり。第二は此繪の空にて、デウイントの繪畫に普通ある處の
雲と異りて、英畠的美觀ある雲なり。デウイントは如何にする
も、雲の形層と、風ある日和に付きては、完全なる研究者にあ
らず。氏が立派なるスケッチには、幾時も幾時も空を描かず
に。殘し置きて、象牙色のクレソウイツク紙に満足して描きつ
つありしなり。此の點はターナー、コックス、コリール等趣を
異にせり。即ち英國水彩畫の雲雀の舞ふなる天空と異なるなり。
デウイントが目を注げる處は、英國の土地と豊饒の收穫にてあ
りき。氏は英國の地面の重みと、新鮮なる芳香を傳ふることに
勤めけるなり。氏が有名なる收穫の景色は實に強壯なる英國の
田畝の芳香と生命とが充滿せるなりけり。
コインフィールド、アイヴィンクホーの第三に認らるゝものは、
空の雲の一種變れるにあり。其色は濕潤ある灰色と滑かなる眞
珠の調子にて鳶色の調子あり。こはインヂアンレットと他の彩
具を僅に混えて、化學上の作用を起して出だせるものなり。イ
ンヂアンレットは單獨に使用するときには不朽なれども（鐵の酸
化物なり。）混合して用ゆるに危険なり。又下塗をして地面に暖
みを帯びしむるには危険なるなり。例之ば「クリケタース」に
於ては空の藍色を腐蝕して全體が狐色を呈しつゝあるなり。さ
れどかゝる色彩の損傷の變化ある繪畫はデウイントの繪畫中に

は稀に見るものにて、多數の繪畫は時日を経るも無事なるなり。
又一方にては油繪の或物は劈痕の入りて、これを修覆するに忙
殺せらるゝ程なり。サウスケンシングトンにある有名なる「コ
インフィールド」の如きもこれに洩れず、空に圓形の劈痕が處
々に顯はれ居るなり。宛らウイリアム、ブレイキの「エンシエ
ント、オブ、デース」が一對の丸にて侮辱されつゝあると全様
なり。如斯なれば、彩具の優劣は措いて、デウイントの水彩畫
は時を経るに從て油繪よりはより早く消滅すべしとけ批評家の
いふ處なり。

奈良雜詠

畔 川

初めて奈良に入る

夏霞 奈良は生駒に入る日かな

兩師已に在り講習生九十名と註せらる

秋暑き 幾間の人や 繪三昧

曉 起

松落葉 我一人ゆく 東大寺

春日社

カナクや なぎの林の金燈籠

丸山師と歩む

歩みつゝ 小萩折りつゝ 語りつゝ